

野外実習の回顧

立教大学文学部史学科ならびに大学院文学研究科における地理学専攻課程の成立については、『史苑』第二八巻第一号、一〇〇号記念特集、「立教大学史学会小史」（昭和四二年一二月刊）に記したので、ここでは、立教大学在職中長年に亘って担当した野外実習について回顧することにする。

地理学は地表に実在する具体的な諸地域を対象とするがゆえに、諸地域の研究に関するさまざまな資料の収集を必要とする。当該地域に関する種々の文献資料の収集と点検はもちろん必要であるが、自ら対象地域に接し、観察し、分析調査を行って、研究にとって必要な資料を直接に獲得することが肝要である。このため、地理学の研究にとって野外調査は欠くことのできぬものである。自然地理学の場合であるなら、機器による計測・観測データの収集が主体となるであろうが、人文地理学の場合には、当該地域に居

中田 栄一

住する人間や社会・文化に関する資料の収集が中心となる。したがって人間を認識し、社会・文化を把握するための人文・社会科学の知識と調査法や調査技術の利用が必要となる。此の点、民俗学における採訪や社会学における社会調査、あるいは経済学における経済調査、歴史学における史料の収集と解読などの方法や手法が参考になる。しかし人文地理学の調査の場合には、対象とする諸地域の諸現象のうち、いかなる現象をどのようにみるかの基本理念が確立していないと、人文地理学の研究にとって必要な資料の収集を十分に行うことはできない。他の人文・社会科学と同様、人文地理学にはその目的、視角、方法がある。この要点をないがしろにすると、人文地理学の野外調査は社会学、経済学、歴史学、民俗学、文化人類学などの調査と区別がつかなくなる。特に、「地理学は地誌が基礎で、地域に関する研究は何でも地理学になる」との観念は危険で

ある。

人文地理学の野外調査の場合に、その基本的問題として重要なのは「地理的環境」に関するものである。それは地域の地形・地質・気候・植生・土壌・陸水・海洋などの自然が、地域住民の活動にとつてどのような意義があり、関わりをもつかという問題である。それは地理的環境（あるいは自然環境）との「関わり」の問題であつて、自然そのものの問題ではない。それはあくまで住民や地域社会の問題であるから、たとえ「自然」を扱うにしても人文・社会科学の問題であつて、自然科学の問題ではない。しかし、「地理的環境」の理解のためには自然地理学の基礎知識をもつことが肝要であろう。往々にして、人文地理学の専攻者の中に、人文地理学は人文・社会科学であるから自然地理学とは異なり、自然地理学とは関係がない。「自然との関係」を考察するのは地理的決定論であり、地理的決定論はすでに批判されているから、「地理的環境との関係」の問題は人文地理学で取扱うべきではない、との観念をもつ者もあるようであるが、これでは人文地理学の意義はなくなり、社会学、経済学、歴史学、文化人類学などとあまり異なることはない。

立教大学文学部史学科における「地理学実習（野外）」は、第二次世界大戦後に史学科が復活し、私が史学科のス

タッフの一人となつてから、少時経つて先ず地理学演習の中で始めた。やがて実習を独立した科目として設け、地理学を履修する学生は必修ということにした。しかし、地理学実習を履修する学生は初めは少く、私の記憶では、第一回の履修者は男女二名で、実習地は丹沢山麓の鳥屋村の山村であつたと思う。以来、履修者は年々増加し、大学院が設置された頃は院生と合同で遂に二〇名をはるかに超え、実習という科目の性格上一回で実施することは難しくなり、二班に分け、遂に同じ実習地で二回、計二週間に亘つて現地指導を行わねばならぬ程になつた。実習地も、右の鳥屋村から千葉県の金谷漁村、九十九里平野の農村工業、煙草栽培の秦野盆地、観光都市成田、地方都市沼津の発達などと東京周辺地域から漸次遠くなり、遂には仙台湾内の田代島から能登半島先端の蛸島漁村にまで及んだ。担当者の旅費は、実施後の請求に基づいて実費が支給されたが、実習地の選定が遠隔地に及ぶにいたつて実習費の予算化が当局から要請され、地域も関東地方及びその周辺地域に限定されることになつた。何年度に何処に実習地を選定したかは既に記憶は薄れたが、大体次のような地域が記憶に残る。栃木県の山村栗山村、利根川上流の藤原ダム周辺、浅間高原の婦恋村、こんにく栽培の山村南牧村と下仁田、神流川の下久保ダム周辺、茨城県の窯業の町笠間、北茨城の大

津・平潟漁村、北関東の機業地伊勢崎・本庄、赤城山麓、多摩川上流の丹波山村、富士山麓から谷村周辺地域、霞ヶ浦、水郷潮来、犬吠岬と戸川漁村、そして御岳山麓から福島県のいわき市など、関東とその周辺地域を学生、院生と共に歩いた。いずれも中心となる課題のある地域を選んだ。毎年平均一〇～一五名程度の履修者があり、その総数は多数にのぼる。幸い、さしたる事故もなく、立教大学在職中、無事、野外実習を担当し終えたことを嬉しく思っている。

実習地の選定は当初は履修者の希望によった。しかし、当局から予算化が要請されてからは、前年度の終わりに実習地を決めて実施計画をたてて予算を組み、履修要項に当年度の実習地や計画を掲載しなければならなくなり、実習地の選定は、それまでの経験から、適当な地域を選んだ。

このため、地理学の研究に必要な「地域選定」についての実習は行うことはできなくなった。しかし、「何故此の地域を選んだか」の理由を明確にした。「野外実習」ではあるが、現地調査ばかりでなく、前期期間中、教室で地理学の本質・方法から説き、野外調査の必要性、調査法について講述し、実習地についての十分な文献研究、当該地域に関する主要な問題についての一般的知識をもつように指導した。そして、史学科の科目の一つであるため、現地調査は、他の科目の履修に支障のないよう夏休み中に実施した。

夏休みに入るとともに直ちに学生・院生と共に予備調査を実施し（おおむね日帰り）、その結果をふまえて調査項目、調査法の設定を行わしめた。履修者の希望により、各自が関心をもつ課題を分担させるようにした。しかし、研究要項の第一項には必らず地域の「地理的環境」に関する項目を設け、他の人文・社会的諸問題に関する項目に関連させるようにした。

以上のような準備を行った後、本調査の実習に入ったが、その期間は、現在のように公共機関が週休二日制をとるようになるまでは、月曜から土曜までの六日間とした。現地指導は、はじめは単独で行ったが、後には二名で行うようになった。現地では、毎日、学生一人一人に付き添って現地調査の指導をした。全く野外調査の経験のない学部学生に対してこのような指導を行うことは相当の重労働であった。公共機関や図書館・郷土資料室で文献資料の収集や聞きとりを行い、農家や漁家に上り込んで、時には一～二時間にも亘って聞きとり調査を行った。履修者の多い場合には、午前と午後それぞれ異なる学生に付き添って現地指導をした。この点、野外調査の経験者である院生の場合には比較的楽で、調査を進めさせながら助言、批評を行った。夜は宿舎でミーティング（研究報告会）を聞き、調査結果を一人一人報告させ、他の項目を担当する学生の参考にする

とともに、適宜、助言、批評を行い、翌日の調査計画をたてさせた。本調査終了後は履修者の自由な補足調査とし、各自、必要に応じて補足調査を行った。後期に入ると教室で調査資料の整理につき説明し、報告書の作成を行わせ、毎回履修者一人一人が報告して検討し、学年末に報告書を提出せしめ、平常点を加味して評価した。調査地の人々に種々お世話になるので、成果の還元ということで、コピー機のない頃は、各自レポートを二通宛作成し、一通をまとめて製本し、地元へ送付して喜ばれたこともあったが、私の定年退職に近くなつて、調査成果の出版費が学校から支出されるようになり、現在では立派な研究報告書が作成されるまでになった。

以上のように、野外実習では方法論から地域選定までやり、予備調査の実習まで行ったので、毎年、実習地域を変える必要があった。おかげで、担当者である私は、さまざまな地域のさまざまな問題についての調査を体験することができた。そして、多くの学生・院生諸君と起居を共にしながら、現地に即して、地理学のさまざまな問題の調査と解明に当ることができたことは、労苦が多いながら楽しい思い出であった。

窺い知る限りにおいては、他大学の野外実習は概ね「巡検」方式がとられているように思われる。履修者が多い場

合には幾班かに分け、教師が付き添って各地を現地見学する方法である。かなり遠い、広い地域にわたり、各地域の地理学上の問題点について文献の上で十分検討して置き、現地を訪れて教師の案内、解説のもとで見学し、それぞれの問題について調べた結果をレポートにするというやり方である。このような巡検は、立教大学の野外実習でも、おもに日帰りで、年に一、二回実施した。武蔵野の新田開発で埼玉県の三芳町（三富新田）や小平市（小川新田）を訪ねたり、秩父の機業地を廻ったりした。巡検方式は、広い地域に亘り、種々な問題にふれることができるが、現地に即してさまざまな問題を調査し解明する力を養成することは困難である。このような能力を養成することは、大学や大学院における地理学コースでは必要なものと思う。地理学は諸地域の記載であるとの観点に立つならば、このような野外実習は、物見遊山か費用のかかる労苦の多い余計なものであるかもしれない。しかし、より広い領域からみるという観点に立ち、それに属するさまざまな地域のさまざまな問題に接して、それを分析、解明する力は、地理学を学ぶ学生や院生にとっては基本的なものと思われる。フィールドは地理学・人文地理学の研究、追究の場であるといえる。

（帝京大学教授・一九八三年まで立教大学教授）